



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

あいさつ

校長 白石 亨

桜が散ると、それに呼応するかのようにハナミズキが咲き始めた。

本校正門の西側にはハナミズキがあるが、4月中旬になると白い淡い花を咲かせて満開になった。このハナミズキの花言葉は「返礼」だ。今から約100年前、当時の東京市長であった尾崎行雄氏がアメリカ・ワシントンD.C.に桜（ソメイヨシノ）を贈り、その返礼として北アメリカ原産のハナミズキが日本に贈られてきた。ハナミズキには相手の気持ちを思い、それに応えるべき真心が込められている。

相手のやさしい気持ちを察し、応えること…。

日常生活の中で、それが顕著に表れるのが「挨拶」だと思っている。

4月も半ばになると専門委員が選出され、生活委員も決まった。生活委員は毎朝、週番活動に勤しみ、正門に立って登校して来る生徒に挨拶を呼び掛けている。しっかりと礼儀正しく挨拶をしてくれている。

そう、挨拶のよさは清新二中の伝統である。

朝や帰りは勿論だが、校舎内ですれ違う際にも「こんにちは！」と多くの生徒が挨拶をしてくれる。

その中でも、「清新二中あいさつ三羽ガラス」と校長が勝手に思い込み、心の中で命名している挨拶がある。

その一羽目は、3年生 I君の挨拶だ。朝、校門に立っていると「おはようございます！」ととても明るい声を響かせてくれる。その声はずば抜けて大きく、弾んでいる。I君においても体調のよくない日や、朝の出掛けにお母さんとケンカをするなどの日もあるであろうが、そのような内面の事情はチラリとも覗かせない。いつでも、どこでも元気に挨拶をしてくれている。大人の私たちでもなかなかできないことだと思っている。

そして二羽目・三羽目は、3年生のK君とAさんの挨拶だ。

二人に共通していることは、登校してくると、スッと相手の前で立ち止まり、気を付けの姿勢を瞬間つくって挨拶をしてくれる。このときの姿勢がたまらなく素敵なのだ。とても気持ちがいい。挨拶はその人の人格や心の在りようを反映させると言われているが、K君とAさんの挨拶はいつも実直だ。温かさが伝わってくる。

また、あいさつは発した瞬間から消えいくが、貰った側の心の中にいつまでも深く残ることがある。

前任校のH中学校での話で恐縮だが、朝の登校時間に、ある幼稚園のバスの送迎時間と重なった。朝のあいさつ運動をしていると、きまって幼児とすれちがうようになった。お母さんに手を引かれて歩いてくる幼児。「おはようございます」と自分の方から声を掛けた。幼児からのかわいらしい挨拶の返答を期待したからだ。

…だが、その期待に反し、幼児には怪訝な顔をされてしまった。お母さんの後ろに隠れ、顔だけを覗かせて「誰だ。この人は…」との不安げな目で見られてしまった。翌日も同じだった。しばらくして、お母さんが「おはようございます…でしょ…」と子供にさりげなく働きかけてくれた。その数日後、前から歩いてくる幼児がはにかんだ笑顔を見せ、「お・は・よ・う」と、ゆっくりと小さな口から4文字を発してくれた。相手がどんなに小さな子供であれ、気持ちが明るくなった。嬉しかった。挨拶の気持ちよさは、子供も大人も同じだ。

「あいさつ」は様々な機会や場面で交わされるが、その本質はただひとつだと思う。

それは相手に対する「親愛」の気持ちだ。もちろん挨拶は社会のルールであり、コミュニケーションツール・手段ではあるが、それらは後付けでしかないと思う。「おはよう」のたった4文字の言葉だが、その挨拶には優しさや親愛の気持ちが内包されてくる。いつでも、誰とでも、温かな挨拶が響き合う学校で在りたい。